

第一次世界大戦と在澳日本人の抑留問題（一）

梶原克彦
奈良岡聰智

総論・解説

第一次世界大戦は、一九一四年七月に勃発したオーストリア¹ハンガリーとセルビアとの局地的紛争がヨーロッパ中に拡大し、やがてアジア・アフリカをも巻き込んで繰り広げられた、史上初の世界大戦であった。日本もドイツおよびオーストリア²ハンガリーと青島・南洋諸島で交戦したほか、インド洋や地中海への艦隊派遣や商船輸送団の展開、さらには対華二十一カ条問題やシベリア出兵など、第一次世界大戦といくつかの直接的な関わりを有している。近年の研究では、これらの事象の相互連関が考察されると共に、日本への第一次世界大戦の間接的な、しかし大きな影響が指摘されるようになってきた³。従来、第一次世界大戦は「現代史の起点」とされるものの、こと日本については「日露戦争と第二次世界大戦」と鑑みて「大戦との関わりやその影響は限定されていた」という見解が通説であった。けれども、大戦がもたらした

インパクトが「存外に」大きかったことが明らかにされ、その有り様を複数の側面から照射する試みが続けられている。

ところで、大戦をめぐる様々な事象のなかで、各国の軍事・外交問題と密接に結びつき、大きな衝撃をもたらしたのが捕虜・民間人抑留者の処遇問題であった。第一次世界大戦期のヨーロッパにおいては、何百万人という大量の捕虜が発生した一方、敵国民間人をはじめとする非戦闘員も、その国際の取り扱い規則がないままに、留置所や収容所で拘留・拘禁された。ヨーロッパにおける捕虜・民間人抑留者の処遇については、近年いよいよ考究が積み重ねられてきた⁴。

翻って日本と捕虜・民間人抑留者との関係についていえば、日本の捕虜政策に関しては従来から研究が進められてきたものの、第一次世界大戦中に発生した日本人捕虜の数がきわめて限られていたため、その研究はほとんど行われていない。他方で、日本の民間人抑留者に関しては、近年在独日本人に焦点を当てた研究が開始されたが、今後一層の事例集積

と本格的な考察が待たれる状態である。第一次世界大戦前の欧州には、外交官以外にも、多くの日本人が、軍人、学者、医師、芸術家、社員、使用人、興行師など様々な肩書で、最先端の学術や芸術を学んだり、生業を持つたりしながら、滞在・生活していた。このうち、オーストリア＝ハンガリーにいた日本人の総力戦体験については、いまだ不明な点が多い。彼等や彼女たちの目には、「八月の砲声」が轟くヨーロッパはどのように映ったのか、またこの日本人たちは総力戦へと向かうオーストリアからの脱出や抑留・拘禁の中で、どのような体験をしたのか、さらにその見聞が日本へどのように伝えられたのか。本稿は、これらの疑問に答えるための基礎作業として、当時実際オーストリア＝ハンガリーにいた日本人の手記を紹介するものである。本資料紹介で取り上げる個々人の手記は、当時の在敵国民間人たちのうち、何十万分の一という「ミクロな」記録ではあるが、それだけに総力戦についての生々しいリアルな肉声を遺したものである。

さてオーストリア＝ハンガリーから開戦後退去した日本人は、外交官を除いて二十二名であり、その他、オーストリアに滞在していたがドイツで抑留された者が数名、オーストリアで抑留された者が二名、ハンガリー在住だった者が六名いた。このうち、同じく医学研修を行っていた植村尚清（ブラハ）と小野寺直助（ウイーンおよびブタペシュト）の両名に

ついでには、すでに、奈良岡聰智『「八月の砲声」を聞いた日本人』と小野寺龍太『日露戦争時代のある医学徒の日記―小野寺直助が見た明治』（弦書房、二〇一〇年）でその手記が紹介・掲載されている。両名以外の人物で手記等が入手できた人物のうち、以下ではまず、開戦時にオーストリア大使であった佐藤愛磨が帰国後に故郷で当時を振り返った講演録（『東奥日報』に掲載）および新聞談話（各紙に掲載されているが、本稿では『東京朝日新聞』『東京日日新聞』『国民新聞』『中央新聞』のものを紹介）と、オーストリアで抑留された翻訳家・城戸愛三郎が解放後に故郷の新聞に送った回顧録（『福岡日日新聞』に掲載）を翻刻・掲載する。

佐藤は前任のオランダ公使からオーストリア大使になって間もなく開戦となり、帰国することとなった。オーストリアへの赴任期間は一ヶ月にも満たないものの、その回顧録には開戦直後のウイーンの様子や、当時のオーストリアをめぐる国際情勢、さらには青島に寄港していたオーストリア海軍の巡洋艦カイゼリン・エリザベートの処遇を含む外交交渉が、最後通牒から国交断絶をへて開戦と至る経緯のなかで克明に描かれており、外交官の面目躍如といった感がある。また城戸は私費留学生としてウイーンに遊学していたところ開戦を迎え、国外へ脱出しようとした矢先に逮捕・拘留となった。それから解放されるまでの約七カ月は彼にとつては艱難の日々であり、その体験談には、収容所の衣食住の状態や官憲

の対応はもちろんのこと、戦争の長期化に伴い民間人抑留収容所システムが構築・本格化されていく様子や、当時の民族観や階級観など、総力戦と個人との関わりを垣間見ることが出来る。次回以降に紹介する手記と併せ、オーストリア・ハンガリーにいた日本人の抑留・退去の実態を知るための一次史料として広く参照・活用されることを期待したい。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依った。

- ・適宜段落を整理し、句読点や中黒を補った。
- ・漢字は原則として新字体を用いた。
- ・同一資料内で表記が揺れている場合、編者が統一した場合がある。
- ・() の記述は、編者が付したものである。

一 佐藤愛磨

① 佐藤愛磨談「大戦乱勃発前後」(『東奥日報』一九二四年十二月十一〜十四日朝刊)

(一)

此の度欧州大戦に就ては、在職期間も短く何等の功績なく帰つて来たのに、同郷の諸君が安全に帰ったといふので郷友会を機会として、此の如く多数にて私を歓迎して呉れるは誠に光栄の至りであります。

只今副会長広沢(辨二カ)君より欧州戦乱の起れる事情、現在の形勢、今後の予想に就て話せとの事でありましたが、余り広い問題で、戦争は果して何時終局するか、欧州列国之之に対する政策方針は如何なるものであるかといふ事は頗る重大なる問題であつて、且つ私の立場から余り詳しい事は遠慮したいと思ひますが、扱て此の度の大戦争の由来は、奥太利の皇太子フランツ・フェルチソナンド太(大)公及妃殿下はボスニアの首府で一青年の爲めに突然暗殺せられた、夫れに何かセルビヤの官辺にあつても関係があるとかで未曾有の大問題となつたのであります。元來セルビヤと奥太利は人種を異にし居るのみならず、六七年前奥太利がボスニア及ヘルツェゴウィナの二州を併合した其後といふものは、セルビヤは常に奥太利に向つて不穩の思ひをしたのである。併し今度の戦争は決して夫ればかりで起つたのではないと思ふ所以は、皇太子殿下は実に英邁に渡らせられ、陸軍々人間に非常の人望を有せられる。一体妃殿下は皇族ではなく普通の華族でありました為め、其の結婚には勿論宮中の反対あり、遂に独逸皇帝の仲裁で漸く結婚式を挙げさせられたが、其の皇子は將來決して皇位に即せぬとの条件でありました。夫にも拘らず殿下に対する陸軍の人望は非常なるものであります。

扱て其の皇太子殿下は暗殺せられた葬式は如何であつたかと言ふに、是れは亦た極めて手輕に済ましたものであります。奥太利皇室の侍従長、これは又た宮内大臣兼財務大臣と

いふので殆ど奥太利の全権を握って居る人でありませんが、其の取計ひで即ち御葬式は極めて簡単に行はれた。其の理由は何う云ふものかと言ふに現奥太利皇帝フランツ・ヨセフは八十六才の老齢であつて、殊に当時は御不例に渡らせられたので、若し正式の葬儀を行はば却て老帝の新なる悲しみを招くに違ひないといふにあつたらしい。併しながら之が為め陸軍々人の激昂は益々高まつたのであります。奥太利がセルビヤに彼のような最後通牒を送るに至りました裏面にかかる曲折があるのであります。

記者曰く、奥太利現皇帝フランツ・ヨセフ陛下は世にも不幸なる御方なり。即ち皇后陛下は一千八百九十八年瑞西に於て無政府党の凶手に倒され、先の皇太子殿下ヴェニス於て情死の如き死を遂げ、第二皇子マキシミアン殿下は奈破翁三世に欺かた（ママ）墨西哥皇帝となりて共和党に殺され、其の皇后は發狂して今日尚ほ奥太利領の瘋癲病院にありと云ふ。而して今や八十六才の高齢に在して再び其皇儲殿下を失ひ給へるなり。

而して奥太利の此の最後通牒は無論独逸の同意を経たのであるが、三国協商の伊太利に対し何等の挨拶もせなんだと云ふ。是れが伊太利の中立原因かと思はれる。私の推察―或は邪推かも知れぬが、奥太利の断乎たる態度に対して独逸は裏

より之を煽つたのではあるまいか。何分今度の大戦の原因経過に就て各国政府の發表した公文書或は新聞に公表せられた各政府の政策態度そんなもののみを見ては、彼んなに急に彼んな大戦が起り得まいかと思ふ。

又た露独の關係を観るに、両者は数十年前より穏かでない。現に日露戦争の如きも独逸が露国の鋭鋒を欧州より東洋に差向はしめんとして蔭にて之を煽つたのだといふ説さへあり。両者の争端の開かるべきは早晩あらうと期待はしたが、斯んなに早く来やうとは思はなかつた。何しろ只今斯の如く複雑錯綜したる欧州列強の外交政略態度等を明かにするは頗る面倒であつて、即ち列強が口に言ふことと心中に思ふこととは必ず違つて居るであらう。夫れで戦争終了したる後ち公平なる歴史家の冷静なる研究を待つにあらざれば、結局今回の大戦乱の原因影響の如きは容易に判断決定し難いだらうと思ふ。故に諸君の歡迎に対し聊か私の奥太利に赴任したる當時より帰朝に至るまでの出来事を申上げたいと思ひます。

(二)

私が前任地和蘭を七月二十三日出發して奥太利へ向はんとした時は未だ奥塞の關係は甚しく切迫せず、新聞にも其の様な模様は未だ見えませんでした。途中巴里に二三日滞在し、親しく友人に遇つて置かうと思つていました所、七月二十五日深更に及んで新聞の号外で初めて奥塞兩國の国交断

絶を知りましたので、最早や此の上猶予しては鉄道全く杜絶し、或は赴任の途も絶えはせぬかと心配し、翌日第一番の列車で、即ち倫敦から土耳其のコンスタンチノブルまで直行する特別急行列車に乗りまして、奥太利の首都ウエンナに二十七日の晩到着した時は最早やセルビヤの公使は奥太利を引揚げた後で、翌朝奥太利はセルビヤに宣戦したといふ有様で、宣戦の布告あるや人民は群集して独逸伊太利大使館に参り示威運動を為すといふ次第でありました。

扱てセルビヤは如何なる国状の所かといへば、露国と同じくスラブ人種で奥太利より最後通牒を受け国交断絶となり、宣戦布告となるに至るまでにセルビヤより露国に援助を求めたのは言ふまでもない。然るに其の最後通牒は、到底独立国として之を甘受し得べきものでない其の様な条件もあつたので、露国は先づ其の回答期間の短いといふ事に口を入れて之を延期せよと奥太利へ懸け合つたが、奥は断然之を拒絶した。其の後に至るも英国の仲裁あり、又た仏国の勧告あり、即ち奥塞間の国交断絶後も英仏は平和の為に尽力したのであるが、然るに突飛にも独逸より露仏に対し十二時間内に動員を中止せよと言ひ出した為め、愈よ露独仏間の大開戦となつたのであつた。

此の時の奥太利の状態は如何であつたかと言ふに、初め露国がセルビヤを援助することとなりますと、為めに奥太利の人心は非常に意気消沈したのであります。或大使から聞きま

したが、奥太利政府にては今回の事件につき露西亜は決してセルビヤ為めに立つものではないと確信していたので、愈よ露西亜がセルビヤを援助すると知れては奥太利の意気消沈は随分甚しかったのであります。又独逸は露国が動くとは思つていたでありませうが、英国は決して動かぬと確信していたらしい。夫れは英国では一昨年より所謂愛蘭自治問題なるものは起りて、其の結果内乱は今日起るか明日起るか、兎に角内乱は必ず免がれぬやうな切迫した状態であつた為め、露独仏三国間の戦争は起り得るとするも、恐らく英国は之に参加するものであるまいと見縊つていた。加之英国は従来大陸で失敗せる歴史を有する為め、近年は成るべく大陸の紛争に手を出さぬ主義を固守しているのであるから、尚更斯う云ふ風に思つたのであらうと思ふ。

夫から独奥両政府は日本の態度をも余程誤解していた。夫れは何故かと言ふに、日本は日露戦争の結果に満足しているものでない、不満を抱いて居るから、独露にして開戦せば日本は必ずや露国の背後を圧迫するに相違ない、或は此の機会を利用して満蒙問題を解決せんとするかも知れぬと云ふので、其の頃独逸では大道で日本人を見ると群衆は之を胴上げしたりした者（ママ）であります。奥太利も亦同様で、一寸日本人が料理屋で食事をしたのを見ても日本万歳を浴せかけたものです。そんな訳で私は奥太利に着任後未だ何人にも面会せざるに拘らず、ウインナから伯林へ新聞電報が行つた。

其の電報に曰く「日本大使佐藤は本日奥勾〔匈〕国政府外務大臣を訪問し、会見二時間に亘れり。其の内容は知るべからざるも、奥露開戦の暁は日本は奥太利の側に立ちて戦争に参加すべしといふに在るや疑ふべからず云々」とあつたさうで、其の偽電の爲め伯林の日本人は一時大に歓迎された。實際の通りかと伯林の船越代理大使から照電がありましたので、早速事実にあらざる趣を答電しました。

(三)

實際私の奥勾〔匈〕国外務大臣と会見したのは七月三十日でありました。老帝フランツ・ヨセフ陛下には例年夏分はウエンナに滞在せられぬのだが、今年は戦争の爲め帰つて居られ、八月八日謁見仰付けらるる事と相成りました。此の謁見は彼の国では非常に大事な儀式の一つで、極めて莊嚴に行はせらる。先づ三台の馬車で式部官は迎へに参ります。其の馬車に大館〔使〕及大使館員残らず分乘し、宮中へ参向するのであるが、大使館から宮中まで約四十五分の距離がある。其の間ウエンナの市民は往來に立止まつて、男は帽を打振り、女はハンケチを振つて日本万歳を唱へた。是れは明かに日本を以て味方とした証拠であります。

夫れで日本の独逸に対する膠州湾遼東の勧告（十六日附）は八月十七日突然私も聞きましたが、独逸も奥太利も頗る之を意外とした。其の前日日本政府から私に対し種々なる注意

もし外交上の経過も打電したさうであるが、一回も電信は彼の地に達せなかつた。其の間全く打合せの出来なかつた爲め、十七日政府より独逸に斯々の通牒を發した其の理由は斯々との電報に接し、全く寝耳に水の思ひを致しました。独逸では船越代理大使より十六日最後通牒を交付したが、初め独逸政府は秘して十九日伯林で發表した。奥太利の新聞に二十日朝之を轉載したので奥太利人は随分一驚を喫したやうであつた。十何年間ウインナの名譽総領事をされた人は大使館に参りまして、貴国が既に独逸に向つて斯る通牒を發せられた以上、友人の勧告もあり辞任申すより外なしと辞表を持って来た。私は、最後通牒を發したものの日独の国交は未だ断絶したりといふにあらず、況んや奥太利間の国交は少しも傷けられて居らぬと言ひ思ひ止まらせやうとしたが、夫れ以上彼是れ申す能はず、遂に辞表を受取ることに致しました。併し副領事は大使館の方にも關係あつたが、自身奥勾〔匈〕国政府外務省へ至り打合せの結果、辞職するに及ばず云ふ政府の言明を得て、私等の引揚まで大使館の仕事をしておりました。それで突然奥間の国交断絶を見るに至つたのか、恐らく其の数□□迄は奥勾〔匈〕国政府に其の意思がなかつたらうと思はれる。私の同僚も、之は独逸の命令だと言ひました。奥太利は初めから日本に敵意はないのだが独逸の指示を聴いたと云ふのであります。

其の關係に就て甚だ可怪しい事は、当時膠州湾に停泊中の

奥大利の軍艦にカイザリン・エリザベスと云ふ約四千噸位の老朽艦があった。日本の対独最後通牒期間の明日に迫つた八月二十二日奥匈〔匈〕国政府より私に来て呉れと云ふので何かしらと思ひ行つて見ると、右のカイザリン・エリザベスは万一日独交戦の暁と雖も之を戦争に参加させたくない。日本の好意に依つて之を中立港に避けしめ武装解除したいと思ふ。電報は英国を経なければならぬ為め奥大利より出す訳に行かぬ。何卒閣下より此の旨取計つて呉れと言ふから、最早や本国政府の指揮を乞ふべき機関〔期間〕も絶えたり、又日独国交破れるとして日本は一国でも敵を少くするを可とする次第であるから、私は一儀に及ばず之に承諾を与へました。又た廿七日米國大使が日本大使館に來りて華盛頓政府の命令なりとて、カイザリン・エリザベスは中立港で武装解除したことを奥匈〔匈〕国政府に告げよとの電報が到着したとの話でした。然るに奥匈が日本に宣戦した八月廿五日前日即廿四日發表した所に依ると、奥大利はカエザリンザベス〔カイザリン・エリザベス〕が独逸側に加はり戦争すべく命令した、従て夫れが為め奥匈の關係は東洋にも及ぶこととなつたとあつたのを見ると、余程可怪しく思はれるのであります。即ち二十二日まで日奥間国交断絶の様見え、二十四日に至り思ひ當つたのであります。

斯う云ふ次第で段々電信は不着がちとなり、教師も多数従軍して学校は閉鎖する、日本留學生の送金絶え生活上漸次困

難を感じんとする有様であるから、余り甚しからぬに帰国せしめんとし、之より先八月廿一日二十余名の學生に説諭を加へ、旅費なきものは之を立替へ、伊大利仏蘭西を経て約十日間かかつて倫敦へ向はせることにしました。

(四)

そこで日奥の国交断絶は前述の如く八月廿五日、日本では二十七日だと云ふことですが、丁度二十五日の昼時分奥匈〔匈〕国政府外務書記官に公文と旅券を持たせ日本大使館に遣はした。其の文面に曰く、云々の理由で奥匈〔匈〕国今や日本と国交を継続すること不可能となつた、故に東京駐劄の大使に引揚の命令を發した、自然閣下との關係も断絶する外はないと云ふのだ。而して旅券を見るに、番号の如き何千何百号とあつて普通旅券の書式に唯だ大使館員の名前を書いたに過ぎぬ、汽車の時刻は書記官に委細打合せよとあつた。

扱て愈々奥大利を出立するに付け日本の利益を代表すべき代理者を残して置かなければならぬ、去りとして最早や本国政府に打合せ〔す〕べき余日がないので、之は米國大使に願つて其の承諾を得ました。

所で奥政府の注意もあり、成るべく目立たぬやうに廿七日午后七時四十分ウインナを出發と定め、昼の中からタクシー自働車五六台を庭に待たせて、夕方五分間毎に一台づつ道を異にしてステーションに行くと、外務大臣代理として書記官

は礼服で見送られたから其の人を通して外相に謝礼した。汽車は勿論特別列車で、鉄道の役員一名随伴したが、ウインナより二ツ目停車場に着くと折柄兵士の輸送ある為め約二十分間停車した。此の時群衆は盛に罵詈雑言を逞しうし、汽車に投石して忽ち窓硝子十五六枚破壊したが、幸ひ私は当時食堂に居り幕を張っていた為め一同無難でした。負傷したのではありません。

汽車は進んで瑞西に入りました。ベルンで帰国の予定を取り調べたが、伊太利より米国に行く道もあるけれど之は何ヶ月かかるか分らない、仏蘭西より英国に行かんとしたが巴里は危険だと聞いたし、夫れに十一月廿七日までは一〔カ〕二等船客は全く収入されぬと云ふ。西比利亞廻りも日本海に浮流水雷の危険ありと聞いたが、一行中には夫人もあるから成るべく安全の道を取らんとしていた所、恰も九月五日日本郵船の常陸丸がマルセーユを出帆すると聞き電報で乗船を頼み、九月四日ベルンを出立しましたが、瑞西政府も仏蘭西の鉄道会社も大に便利を与へて呉れた。

其の途中仏蘭西のリヨンに一泊の為め予め旅館を依頼したが、当時リヨンは巴里からの避難民を以て充滿し、一日中暇を費して旅館を探したが見当たらずと云ふので、私は四畳半位の一室に一夜を明かし、其の他は領事館に止宿した。翌朝は午前六時の列車で出発せんとて五時に起き、馬車を雇はんとしたが、是亦一台も見付からず、遂に日本橋から新橋まで

位の距離を従者と共に、私等は大きな鞆二つづつを両脇に抱へて歩き、生来初めての辛い目に遇いました。停車場へは漸く時間前に着いたが、爾うしたら生憎汽車は遅れたと云ふ。一時間待つても来ぬ。二時間待った。扱てリヨンの停車場は宛然火事場の如くである。婦人は幼児を抱いて鞆を枕に寝ている。夫れ汽車が着いたと言ふや、吾れ先に乗んと争ふ。マルセーユに着いたら船長佐藤豊作氏は船長室機関室等をあけて歓迎された。途中例のエムデンの為めコロンボに一週間滞在した。若し二十四時間遅く着いたら撃沈は免がれぬ所でした。夫から新嘉坡まで三度軍艦に注目せられ停戦を命ぜられた、何れも英仏艦であつたので仕合せでした。コンナ訳で今度の戦争に就ては私が塊太利に滞在したのは僅々三十日間で、従て働くべき時間もなく實際亦た働きもせませんでした。

之を要するに欧州の文明も随分金箔を塗つたものが多く、一皮剥げば野蛮の本性をあらはすことが今度の戦争で能く分つたのである。又た国家と国家は利害を以て相交る利益なければ即ち相分れる。之が為めには数十年來の同盟国を袖にしたものもある。其の中には又吾が同盟国の如く白耳義の中立を保障する信義を重じて、多額の金を出し多数の人を殺してまでも戦争に参加したのもある。又た日本の如く英国との同盟を重じ、東洋の平和を維持確保せんが為め干戈を動かした国もある。而して独逸は十九世紀各国が盛に殖民地を獲得し

た際に其の機会を失し、今や纔に世界の遺利を占めんと欲しつゝありたるに、膠州灣を初め南洋カロリン群島を失ひ、漸次其他をも喪はんとして居る。最後に私は帝国が英国との信義を重じ今回の戦争に参加したのを最も適當と信ずるのであります。(完)

② 「佐藤大使談」(『中央新聞』一九一四年十月二十一日朝刊)

独塊よりの引上げ邦人を乗せたる常陸丸は、予定より一日早く二十日午後四時半神戸入港、同七時塊洪国大使佐藤愛麿氏以下上陸、直にオリエンタルホテルに入り、二十一日桃山御陵参拝後京都に一泊して東上する筈。

▲佐藤大使談

「予のウィーンに入れるは七月二十七日にして、鄭重なる国民の歓迎を受け滞在僅か一箇月にして八月八日皇帝に見えたるが、是れ即ち最初の謁見にして又最後の謁見なりき。而して八月二十五日夜ローマ法王の追悼式あり。式場に於て陸海軍其他各大臣も出会し大使館に帰りたるに、外務大臣の使者として書記官往訪し、直に旅行券を交附せられたるを以て二十八日ウィーンを立立し、政府の好意になる特別貴賓車にて無事シュツテルドルフ迄引上げたるが、同所にて暴民汽車に投石して窓ガラス十数枚を破壊せられたるも、一行幸ひに無事リオンを経マルセーユより常陸丸に乗船したり。又塊国

留学生は十三名にして、内藤井恵(慶)乗と云ふ僧侶一名はデロフブルグ市の寺院にあり居残りの決心なるが、同氏に對しては塊国僧侶等は身体の安全を保證すべきことを約す。」

③ 「塊国皇帝は今尚御壯健なり 佐藤大使の帰朝談」(『東京日日新聞』一九一四年十月二十二日朝刊)

二十日午後六時神戸入港の常陸丸にて帰朝せる元塊地利駐劄大使佐藤愛麿氏の談に曰く、「予が塊地利大使として維也納に着任したるは本年七月廿七日にして、それより八月廿七日引揚に至る迄僅に一箇月に過ぎ、此間に於て今回の大戦乱勃発したる訳なれば、

▲多忙なりし事は想像外なり。余が皇帝に謁見したるは八月八日、即ち露塞仏既に国交断絶の後なりしが、当時ジョセフ(ヨーゼフ)陛下は御壯健の様子にて種々御言葉を賜はりたるも、一言も国交のことに涉らざりき。世間にてはジョセフ陛下が病氣に罹りしなど伝ふるものありしも、そは全く誤伝にして、帝は目下比較的御壯健の方なり。邦人の塊地利に在留せるものは、

▲僅に二十一名に過ぎざりしも、塊地利人の為め凌辱を受けたるものは極めて稀にして、唯一人維也納の独逸領事館内に於て独逸人の為に帽子を破られしこと有りしのみ。維也納引揚げは実に咄嗟のことにて、去八月廿五日羅馬法王の葬儀当日、維也納の旧教寺院に塊地利の内閣大臣及外国使臣集まり

たる砌余も又参列せるに、

▲**奥国の内閣員及独逸大使等**が全く言葉を掛けざりしを以て審しき事と思ひ居たるが、同日余が其寺院を引揚げて帰還するや、外務省より旅券を送り来り、直に引揚げを要求せり。最(尤)も余は我政府の命に依り、在留邦人に対しては八月二十一日迄に其れ引揚げを命じ、全部旅費を大使館にて立替へ倫敦迄引揚げしめたり。

▲**在留邦人中藤田某**(藤井慶乗)と云ふ基督教僧侶のみは、奥国の牧師等が保護する筈なるを以て是非在留すると申出でて残れり。其等の引揚げ邦人は、八月三十日及三十一日の両日無事倫敦に着したる由。余は八月二十七日奥国政府の命に依り、特別仕立の貴賓列車に投じて館員一行十二名と共に維也納を出発し倫敦に渡る筈なりしも、通路危険なりとの報を聞き瑞西より仏国領内に出で、マルセーユより乗船し帰途に就きたり。

④ 「佐藤大使帰る 多数留学生も常陸丸で帰朝」(国民新聞) 一九一四年十月二十二日朝刊

二十日別項の如く神戸に入港せる郵船常陸丸には、奥国を引揚げたる駐奥大使佐藤愛磨氏、西参事官、大野書記官、白根大使館附武官、平田莫斯科領事夫人の一行及小川、松岡両法学博士、白石造船少監、入谷主計総監、平岡海軍少佐等を始め、一時行方不明を伝えられたる多数の留学生あり。佐藤大

使一行は同夜直にオリエンタルホテルに投宿せるが、大使の談に曰く、

▲**駐在僅に一箇月**

予が奥国駐在を命ぜられ、前任地和蘭を引揚げて、巴里を経て維也納に到着したるは、七月廿七日にして、翌二十八日は則ち奥塞兩國の国交断絶の日なり。次で日独開戦となり、間もなく日奥の国交断絶を見るに至り、予が同国政府より旅券を交付せられたるは八月二十五日の事なりき。

▲**老耄国の哀れさ**

乃ちその翌々日廿八日を以て、予及び館員一行は大使館を引揚げたれば、予の奥国駐在は僅々一箇月に過ぎざりしなり。予が維也納に著任当時は奥塞兩國の風雲逼迫し居たる時なれば、奥国民は一般に元氣にして「塞国何者ぞ」といふが如き意気込みに見受けられたるが、愈々開戦となるや、同国民の元氣は一時に沮喪し、爾來戦機熟するに及んで其意気の揚らざる事甚だしく、老耄国の現状実に哀むべきものありき。

▲**僅に一度の拝謁**

予が信任状捧呈の為め奥国皇帝に謁見を許されたるは八月二十日にして、勿論当時は露奥開戦後なりしが、皇帝にはアノ御高齢にも拘はらず壯者を凌ぐが如き御元氣にして、御機嫌極めて麗しく有難き御詔を賜はりたり。而も予の奥帝に拝謁したるは之が最初にして又最後たりしなり。而して陛下には此時まで日本に対して隔意を持たせ給ふが如き万事あらう

筈もなく、又

▲ 奥国民の思違ひ

同国民一般にも初めは露独塊開戦せば、日本は勿論日露戦争の關係より独塊に味方し、露国の背後を突くならんと期待し居たり。されば予が拜謁の時の如き、維也納の市民は予の馬車の過ぐる処を熱誠に披瀝して大に歓迎したり。旅券を交付されたる日は恰も羅馬法王の葬儀の当日にして、維也納に於いても莊嚴なる儀式あり。

▲ 独大使の不穩な面

同国の有司百官は勿論、各国の大公使連も式場に連なりいたるが、予の隣席にいたる独逸大使は絶えず穩かならざる面持を為し、散解後は傍らなる奥国大臣等と何事か目と目とて言葉を交し、共々に立去りたるが、予は別に氣にも止めず居りたるが、間もなく一人の使者は秘密親展書を持つて予が許に來れり。之れなん旅券の交付なりき。

▲ 文学士藤井慶乘

乃ち予は旅券の交付を受くるや、在留本邦人に対し引揚の通告を發して、倫敦までの旅費を給し、夫と同時に予等一行も維也納を出発したり。時に八月二十八日午前七時四十分なりき。當時在留本邦人は、館員一三名と留学生二十一名にして、留学生中只一人寺院にいたる文学士藤井慶乘なる者は、寺の住職が懇に世話し呉れると云が儘に退去命令も聞かず、独り同地に残れり。

▲ 帰還途中の暴行

而して予等一行の搭乗せる列車は、同国政府にて特別に仕立呉れたるものにして、曩に英仏露の大使等も同じく此列車にて、而も同時刻に引揚げたれば、一般に此列車を大使送還列車と云へり。斯くて予等は瑞西を経て仏国里昂に出で、馬爾塞に到り、同地にて常陸丸に搭乗したるが、日本が味方をして呉れるならんと頼みにしていたる奥国民は、一旦兩國の国交断絶するに及んで、予等に対する反感は極度に達し、途中奥瑞国境のボックス駅に停車したる時の如き、多数の群衆は予等の列車を見て盛んに罵声を浴びせかけ、遂に投石するに至り、窓硝子を十数枚計り破壊されたれば、以来は固く窓を閉し、辛うじて瑞西に入るを得たり。在留本邦人中にも一二彼等の為に毆打されたるものありたりと聞けり。

因に大使は二十一日は桃山に參陵して京都に一泊し、二十二日搭乗する由。其他の人々は或は或は神戸に宿泊する人もあり、直に東上せる人々もありたり。(神戸電話)

⑤ 二元帥服を召されし御元氣な奥国老帝 入京せる佐藤大使談(『読売新聞』一九一四年十月二十三日朝刊)

廿一日神戸着の常陸丸で帰朝した奥国大使佐藤愛麿氏、西同參事官の一行は、途中桃山御陵參拜の上、国府津迄出迎へた伊藤公等に擁せられ、二十二日夜九時五分新橋に着した。駅

には夫人松子、

△三令嬢を首めとして、加藤外相、秋月前塙国大使、杉村前独大使、松井次官、末松子爵等の一団出迎ひ、何れも無事を祝した。大使は焦茶の背広に同じ色の中折を冠り、いと快活に雨の如き握手の中を馬車に搭じて其の自邸に入った。大使は、「予は塙太利には

△僅々一ヶ月しか居なかつたので、談話の材料は殆ど持たぬ」と前提して、老皇帝フランツ・ヨセフに謁見の光景を可成り詳細に亘つて語つた。「予が塙帝に謁見仰せつけられたのは八月八日で、已に露塞と火蓋を切つて国内戦乱の真最中であつた。此の朝塙皇室よりは三台の絢爛やかな馬車が

△大使館に廻され、予は式部官と相對して第一番の馬車に搭じ、第二第三の馬車には我が館員が充満に乗つた。その頃はまだ、日本は日露戦争の關係上必ず露の背後を衝くであらうと一般に信ぜられて居た際だから、途上市民からに非常の歡迎を受けて意氣揚々

△宮殿へ乗り込んだ。宮殿では、階下階上の要処要処には侍従とか式部官とか云ふ人達が立つて居て、下へも置かず謁見室へ導いてくれた。謁見室は可成広いお室で、此処には老皇帝唯お一人、陸軍の元帥服厳しく、八十余の御老体とは思へぬ程御元氣に立つて居られた。余は型の如く

△信認状を捧呈したところ、陛下には流暢なる仏蘭西語で「前任地は何処なりしや」「何時海牙を出発せしや」など極め

て打ち解けて話し掛けられ、進んで堅い握手を賜ふた。陛下には予て英語にも仲々御堪能と承つては居たが、何故か此の時は「仏語で話しをせずや」と仰られたには、時節柄

△英国に對する御感情もやと拝され、いと恐懼した。又予は当時皇儲殿下の御兇変に對して何か一言弔詞申し上げたいと思つて居たが、老帝が鬚々たる白髯と、打ち寄する憂ひのお皺を拝しては、言咄して頓みに言葉さへ出なかつた。陛下にもまた其談話の出でざる事を冀つて居られる如く恐察した。其後船中で屢々

△老帝崩御の説を耳にしたが、それは何等か為にする者の流言である事を知つて、遙に陛下の御健康をと塙皇室の祝福を祈つたのである。」更に大使は、和蘭退去の際同国皇室が英國を通じての日本に對する好感情を手短に語られた。曰く、「和蘭は我國に對して非常に好情を有つて居る。予が

△同国退去の際は態々ベットローの離宮に召され握手を賜ふたが、女王が握手を賜はるのは余り類例の無い事で、予は非常の光榮感じた。和蘭女王は我が明治十三年八月卅一日の御誕生に在まし、我が聖上陛下とは一御つ違ひの同月同日の御生れには居らせられるなどは一寸妙である。斯くてマルセーユ発

△帰朝の途に就いたが、新嘉坡沖で仏国駆逐艦に砲撃された時は一寸驚いた。然しそれは、濃霧の爲め何国の船なるか不明の爲め停船を命じた空砲であつた事が知れて、ホツト息を

吐いた」云々。

⑥ 「佐藤駐塙大使談」〔『東京朝日新聞』一九一四年十月二十二日朝刊〕

▽廿二日京都発東上

和蘭公使より駐塙大使に転ずるや忽ち国交断絶に会ひ、急遽維也納を引揚たる佐藤愛磨大使、西参事官一行十二名は、二十日午後七時神戸入港の常陸丸にて帰朝せり。大使は一行に別れてオリエンタルホテルに一泊、二十一日桃山御陵参拜の上二十二日早朝京都発東上の予定なり。大使の談に曰く、予は七月廿七日赴任し八月二十七日に引揚げたれば、滞在期間一ヶ月に過ぎず。欧州の禍乱が斯く拡大せんとは塙国人等も八月二日の露国宣戦迄は思ひ居らざりき。最初四五日維也納市は恰も戦捷を祝ふものの如く色めき立ちしも
△露の大兵南下の報達するや市中は一夜の闇に静まり返れり。更に塙軍連敗の報到るや、大学より中学に至る迄講義を廢し、僅に

△小学校のみ授業を続ける有様なりき。此間塙国上下の日本に対する態度如何といふに、当局は知らず民衆の多数は、露国の背面を襲ふて獨塙の軍事行動を援くべきを想像せしもの如く、予の謁見の爲め参内する途中、群衆は予の自動車を擁して、

△日本万歳杯盛に歓呼を浴せ掛けケルニツセ・ツアイニング

の如き、予の未だ外務大臣と会見する以前なるに拘らず、日本大使外相と会見と題し、二号活字を以て、

日本大使は本日外務省を訪問し、外務大臣と共に一室に於て二時間半の会見を遂げたり。其内容は秘密に附しあれども、確かなる筋より聞く所に依れば、日本は極東に於て露国を襲ひ、東普露西に於ける独逸の行動を援助すべしといふ点にあるもの如し。

など記載したる位なり。然るに八月廿五日維也納にて羅馬法王の葬儀あり。予又之に列席したるが、対座し居たる独逸大使と塙国内閣員は式中俄に席を外して立ち去りたり。然るに予の帰館後、外務省より差遣したる書記官の来訪あり。其齋し来れるは、予の

△立退を求むる通告にして、即刻維也納を引揚られたしといふにあり。予は予期したる事にて、二十七日午前七時四十分維也納出発に決し、瑞西を経て馬耳塞に出で、常陸丸船長の好意に依り辛うじて帰朝するを得たり。維也納出発の際は塙国政府より特別列車を仕立て国境ボックス迄送り出し呉れたるが、或駅にては

△砂礫を投げ付けられ、一等室の窓硝子十数枚を破壊されたり。併し一人の負傷せざりしは幸ひなり。塙国在住の日本人は総計二十一名なるが、一部は大使館より立替の旅費にて倫敦に避難し、他は皆伊太利、仏蘭西に逃げ、今残留せるは藤田珪城〔藤井慶乗〕とて耶蘇教会堂に勤め居る。

⑦ 「最初にして又最後の謁見 佐藤大使帰京談」(『東京朝日新聞』一九一四年十月二十四日朝刊)

別項の如く二十二日帰着したる駐塙大使佐藤愛麿氏を途中に迎へたるに、大使は老帝フランツ・ヨセフ陛下に最初にして且最後の

△謁見の模様を語る。「予が陛下に拝謁仰せ付けられたるは八月八日の正午なるが、当日は時刻に先立ちて塙地利宮中よりは特に美々しき三台の馬車を大使館に差廻され、新任館員等は二台の馬車に分乗し、予は案内の任に当りたる塙国式部官と相對して最後の国賓馬車に同乗し、サクシアナル路の大使館を出で約四十五分にてシエンブルンなる宮殿に着したり。雅麗宏壯なる宮殿には各廊下、階段の隅々に至る迄盛装せる式部官等起立して威儀を盛にし、自から襟を正しうせしめられたるが、予は館員と別れ式部長官の先導にて

△階上謁見室に赴けり。此處にて式部長官と別れ、扉を排して一步室内に入り眺むれば、本年八十四歳の御高齢乍ら氣力尚壯なるフランツ・ヨセフ陛下には陸軍大元帥の服にて、室の中央なる玉座の前に起立せられ、予の御前に進むを待ちて自ら御手を差伸べ握手を賜はりたり。予は聽て恭しく我天皇陛下よりの国書を捧呈したるが、老陛下には尚も流暢なる仏蘭西語(陛下は英語を解し給はずと云ふ)にて予が前任地和蘭の国情など御下問あり。御機嫌頗る斜ならず拝せられたり。当時陛下には皇儲殿下

△兇変の御悲嘆未だ癒え給はずと見え、眉宇の間自から憂愁の影を止め給ひたれど、予は陛下の脳懷を拝察して弔詞を呈するの却て新なる愁思たる可きを思ひ一言も其事に及ざりき。当時既に欧州大禍乱の妖雲全塙に漲り、塞爾比公使は素より英、仏、露等の各大使も国旗を徹して塙国を引揚げたる際なれば、新任日本使節たる予の謁見は予て日本の親塙説を予想し居たる老陛下に対し特殊なる希望と好感とを与へたりと見え、陛下には終始広き室内に予と二人のみにて対座し懇談しつつ、一人の侍臣さへも近付かしめず、最後に辞去せんとするや、特に我大使館員一同を引見して一々優渥なる御詞を賜はりたる程なりき。」

二 城戸愛三郎

○ 「塙国拘禁當時を偲ぶ」(『福岡日日新聞』一九一五年七月二十九日〜八月九日)⁶⁾

(一)

筑前宗像郡神興村久未出身城戸愛次郎氏は、七年以前欧州に渡航し、独逸文学専攻中昨年開戦の當初、塙国維也納に在りしが、遂に同国官憲のため拘束さるるに至り、捕虜同様の憂目を見ること七ヶ月間にて漸く解放され、今は仏国巴里に滞在研学中なるが、氏は最近塙国拘禁當時を回想して其事情を本社に通信し来れり。即ち左に掲ぐ。

時は昨年六月廿九日、奥国王位継承者フランツ・フェルリナンド大公及び其の妃が、ボスニア州の首都山水の美絵に書けるが如きサラエボで、ペーター・パウルス祭の前日セルビヤ製の短銃に倒れ、憐く黄泉の友と消え果てられた。此の銃声を合図に欧州は此の世ながらの修羅場と化し、大砲小銃雷轟電激坤軸為めに震動し、北海の水悉く赤からんとする有様となった。大公野辺の送りの當日は突然空掻き曇り雷鳴激しかったので、占星家などは大いに悲観して、事の尋常ならざるを予言したのである。吾々はセクスピアのシーザーにある預言者の事など考えて、此の占星家の言も半信半疑でいたのである。すると老衰腐敗した幾多民族の一致を缺くと云われた奥国は、露国が出て来る事を知りながら、三国同盟を楯にして遂に最後の通牒をセルビアに出し、暗殺事件に与れる軍人、官吏の免職、又奥国警察の手によりてセルビア国中に暗殺共謀者を探索し、之を処罰する事などを要求し出した。セルビアは、新セルビアを合わせても、人口六百万に過ぎぬ小国なり。奥国と単独兵を交ゆる事は出来ない話だが、強大な露国が後押しするから中々剛情、七月二十五日奥国最後の通牒の期限が切れると云う二分前に拒絶に等しい返答をして置いて、政府はベルグラッドを立ち退き全国に動員令を公布した。

維也納では全動員の令が出、人民は「打てやセルビヤ、懲らせや殺人民族、武勇勝れし吾軍はオイゲーニウスの宮に導

かれ、勇み進んでセルビヤの首府ベルグラッドを踏み潰せ、奥国万歳」と提灯行列をやり、陸軍省やシユワルツェンベルグ將軍の銅像の前に来りては愛国的演説をやり、「吾愛すベキ奥太利は、今や再び若返るの時来たれり。オイゲーニウス宮の靈魂は現れて、我が健児を指揮しつつあるにあらざるや。諸君勉めよ、セルビアを蹂躪するは朝飯前の事なり。露仏ありてセルビアを助くるの日には吾に独逸あり、伊太利あり。日本は露と不倶戴天の敵なれば、満洲西伯利亞を侵し、露国の熊に鉄拳を加うるは疑いなきにあらざるや」などやる。広い通りリング街、ケルトナー街、グラブンなどは人の山で往来が困難、料理屋コーヒー屋は国歌や「ラインの固め」を謳う人は皆戦争熱で狂する計り、将校兵士は人に擔がれるもあり、万歳三唱して武運長久の杯を傾けるもある。中には妻子の事を思てか、また軍に行けば必ずしも凱旋するばかりで無い事を思てか、悲しそうな顔して暗涙をこぼして居るものもある。次で露奥の戦いが始まつてからは、吾人日本人は到る所で歓迎されたものである。コーヒー屋などで逢う軍人は自ら握手を申し込んで、「共に侵略的露国を打ち世界の平和を永遠に恢復しようではないか。露は貴国の敵で又吾々の敵、否世界の敵人道の敵である。日独奥の間には何等書きたる同盟はないが、精神上の同盟此の三国中に存立して居る事は、何人も疑いはない所である。幾百人の日本学生は独逸、奥太利で留学し、學術を学び得て、独逸文明の花を極東日出

国で咲かせて居るではないか。又独逸の学者軍人は日本に行きて、教鞭を取つて居る。国亦親密にして利害の衝突あるは一ヶ所も無い。故に吾人は日本が吾が戦友として露軍を駆逐する事は確信して止まないのである。日本人万歳」と地にも置かぬようにする。

(二)

當時維也納の停車場より遠征の途に着かんと町を横切る兵卒の一隊は、吾々日本人を見てさも嬉しそうに日本万歳と高く唱える。吾人は只帽を取て之に答礼する計り。山の如き見物人見送人は、兵士の呼日本万歳にて初て見物人の中に日本人あるを知り、又万歳三唱をやる。新聞には毎日、日本軍隊の強盛なる事、露国が今に東西より挟み撃ちに遭いペーターズブルク陥落も近きにありなど、元氣旺盛なものであった。すると衆人の予算と異つて、仏蘭西は会稽の恥を雪がんと為め、ベルギーは国防の爲め、英国は一世に両勇並び立ち難きを見、独逸陸海軍の拡張何れ近き将来に於て自国の存在に害あるを予想して、好機逸すべからずと相次いで独逸と兵を交ゆるに至つたとき、独逸伊同盟の君主を絵に書いて市中を擔ぎ廻つた甲斐も無く、伊太利は局外中立する事を聞いた時はもう氣焰銷沈して、将士は「英国迄も吾々の敵となつたのか、仕方が無い事だ、政治家の失敗は我々の関する所でない」と大長息をついたのである。

溺死しつつあるものは藁でも攫む。獨逸は四方に敵を受け事急危なるを知るや、希望は欧州外に走せ日本を最善の戦友、東洋の同盟国と見做し、日英同盟の存在すら非認してしまつた。此の獨逸最後の希望たる日本が、學術上師弟の關係ある日本が、内国では七尺去りて師の影を踏まずなど云つて、師の恩の忘るべからざるを論じながら、三国と手を携へ獨逸の勢力を極東で全滅してしまつたもんだから、其の失望憤激と云つたら比較すべき物が無い。日本は長々曖昧の中にありて（獨逸の新聞に依る）、突然八月十九日に最後の通牒を出し、獨逸が膠州を日本官庁に引渡す事を要求した。獨逸では、大使館の指図で大部の日本人は引き上げてしまつた。獨逸でも、危険はなくとも送金の都合が悪くなるから、帰国するか、瑞西、仏、英等に行くが良からうと云われた。依つて官費で来ていた留学生等は、国から金が来ないと仕方が無いとて、最後の通牒の期限が切れない前に獨逸を立ち退いたのである。

吾輩は他の学生とは異り、国からの送金の都合が悪くなろうが其れは苦學奮闘の身だから平氣なもの、其れのみならず維也納大学教授の依託でやつて居た翻訳物が今一週間にて出上来がるときである、警視庁でも仮令日獨戦争が始まつても拘禁したり、貴君の一身に迫害のある様な事は無いから、維也納に居ても大丈夫であると云う。依つて吾輩も一寸安心して、兎に角他の日本人は立つても翻訳物は済ましてと猶平

気で居たのである。始めの中は両国の国交断絶になつても別に變つた事もなかつたが、八月二十四日頃より少し人の待遇が悪くなつて来、珈琲屋などは、此所には「独逸のお客様が沢山お出ですから日本人に珈琲を出す事は叶いません」と云う。料理屋でも矢張り斯麼調子で食物を出さないのである。二週間以前に握手した先生等も鉄拳を握つて吾輩を罵詈する位だから、其他の者は「日本人殴れ殴れ」と叫び出す。止むを得ないから街道に出ると、後から追いかけて来る。往来繁きマリヤヒルファー街の事だから、一匹の犬が吠え出すと千匹の犬が之に見做うて目的なしに吠ゆる如く、彼方からも此方からも駆けて来て、忽ち五十人あまりの彌次馬連に取囲まれた吾輩は重囲の中に陥つたのであるが、何所までも韓信的で居た。先生等は例の通り日本の所置の非なる事を難じ、「何の理由あつて独逸境太利を攻撃するのか、年来の恩を忘れたのか、恩知らず奴が」と一人がやると、他の者は「其所の黄色いのを殴れ、生かして返すな」と高く叫ぶ。其の権幕が中々激しい。如何云うても聞いて呉れないから、吾輩は一策を案じ出し衆に向い、「公明正大なる諸君、諸君は吾輩が日本人に非ずして支那人なる事を知らないのか。日本人は曩に皆維也納を引き上げたではないか。諸君は斯く支那人を虐めるが、支那は貴国と開戦したのか」と言つと、皆呆れ返つて暫時は返答もない。やがて其の一人は「ああ貴君は支那人でしたか、其れは飛んでもない迷惑掛けまして相濟みませ

ん。日本人と支那人とは能く似て居ますもんですから」と詫び入る。吾輩は「将来氣を付けて居ないと御国の体面を汚す事があるかも知れん」と威してやつた。電車の中でも「ヤレ日本人が乗つて居るよ、其の黄色いのを下せ」など云うのであるから、乗車も出来ない。

(三)

斯の如き事が毎日あるから、八月二十六日午後五時半の汽車で瑞西に向つて出発する積りで総ての荷造もし、切符迄買つて居ると、其日の午前十一時と云うに、吾が部屋の戸を叩くものがある。「御はいり」とやると、入り来る者は雲着くような一見識も無い男。來意を聞いて見ると、懐中より円形銅製のものを出して刑事巡查なりと云う。「來意は今より貴君に警察署迄同行して貰いたい為である。直用は濟むので別に御心配ならなくとも宜しい」と云う。刑事巡查に連れられてエリザベツト警察署に來ると、原籍など聞いた後、ネツクタイ、ズボン吊、靴の紐、紙入れ、金錢等所持品を悉く取上げられ、第五階の広間で英仏、露人と二三日暮す事になつた。昼の間は此広間で退屈ではあるが、新聞読む事の出来、食物は何でも金さえ出せば番人が買つて来て呉れる。但し政府の食物は、黒いパンと糊見た様な汁丈けだから食べられない。夜は二三十人休める様な寢室で寝るのだから、別段不平も云えなかつた。

二三日経って行李の検査を始め出した。吾輩の行李の中には、日本文、英文、独文、仏文等で書いた手紙が沢山あり、其の中に奥国予備陸軍大佐の書類が二三通見付かつ〔た〕ものだから、問課嫌疑の辞に暗い一坪位の小室に閉じ込められてしまった。床は土地、窓の部屋の上の方に半紙一枚位の大きさのがあるが、太陽の光も入り来らず、月も照して呉れない。部屋の中には便所あり、小さい机と腰掛があつて其の机の上には水の入れたる瓶が据えてある。左の方の壁には鉄製の寝台がくつつけてある。部屋の戸には小さい穴があけてあつて、獄吏は時折内を覗き見る。食物は朝は黒いパン一片、昼は黒パンと糊汁、晩は復たパンと水である。吾輩は政府の食物は一つとして食う事が出来ないから、獄吏に願つて「下に預けてある金で何か食える様なものを買つて呉れよ」と言うけれど、決して許して呉れない。空腹で仕方が無いから、獄吏がもつて来たパンを齧つて見るけれど、固い石の様なパンで食う事が出来ない。依つて人間は水さえ飲んで居れば四十一日間は死なぬものと聞いて居たから、其の言の真否をためしてやろうと決心し、豚にやる様な食物はもう食わぬことにした。

寝て居れば飢を凌ぐに都合が好いと思うけれど、床は昼の間は使用する事の出来ぬように錠をもて壁に固着してあるから此れも不可能。読むべき書とては一冊も無く、畜腰掛けて懐しい故郷の事を思い、吾れは異国に捕われの身となつて、

飢餓堪え難きを慈愛深き父母は之れをも知り能わぬであらう、我が六千万の同胞は楚に囚たるの艱難辛苦の万分の一もわかないのだらうかなど、彼れを思い、此れを思い気も錯乱する計りである。腐敗して居る窓は嵐の為にがたつき、暗黒なる雲は東の方へと急ぎ行く。ムンカクスの獄屋に捕らわれて居たアレキサンダーイブジャンチーの昔も忍ばれて、断腸の思いがしたのである。幸にしてポケットの中に銅貨二枚発見し、之を壁に投げ、転々して来るのを拾つては投げ、斯くて狂気となる事だけは助かつた。午後の九時には獄吏が寝台を下して呉れる。藁の布団は濡れて居て黴が生えて、上から掛けるケツトは如何なる故か臭気鼻を突く。暫くすると南京虫の攻撃、蚤の吶喊、一刻も眠る事が出来ぬ。起きて居れば飢餓に悩まされ、寝て居れば南京にやられる。困窮の程形容することがないのである。斯かる処に吾輩は、四昼夜眠らず食わず困難したのである。

吾輩が此の部屋に押込められない前に、警察官は「貴殿を拘禁する必要はないから、瑞西に向つて御希望通りに出発された方がいい」と言うから、吾輩も直立つ積で居たのに、維也納大学の講師ベボイチユと云う人が、翻訳代日本語の授業料として二百クローネン（日本の約八十円）程吾輩に借財がある。此の人が書を寄せて、九月三日迄其処に居て呉れよ、金は其日迄にはきつと自ら持つて来るからと云うのだから、警察官に願つて該署に居る事にして居た。処が九月三日は来た

が、ボイチュ先生来らず。四日にも来ない。然し今一日待つて来ないなら立つ事にしようと思ひ居た。すると九月五日の午後、吾輩は他の捕らわれ人と共に近傍の兵營に移されてしまった。吾輩は抗議しようと思つたが、警視は居ないし仕方がないから、遂に命に従つて兵營に移つたのである。

兵營に来て見ると厩に類する部屋が十間許りあつて、兩壁沿ひ又は部屋の中部を横切つて麦藁が敷いてある。此処に吾々は起居せなければならぬのである。斯くの如き畜畜的住所でも、曩の暗黒室よりはましである。此処では矢張南京蟲や蚤には出られるが、藁は乾いて居る。他の捕らわれ人と話も出来る。食物は朝は珈琲とパンを呉れる。其の他は自ら買つて食うのである。部屋は大きいが、不潔極まる露西亞の労働者や乞食などが何百人と居るのだから、見ても氣味が悪くなる位であるのに、先生等と一緒に寝、金盥見た様なものに入れて持つて来た珈琲を口突込んで牛の様に飲むんだから、夢としか思われぬのである。

(四)

明くれば九月六日。吾々は此日午前八時の汽車で、塙太利のドナウ河の一支流タイア川に臨んで居る一寒村ドルゼンドルフと云うて、維也納を距る事急行列車で四時間半という所に流されるべき宣告を受けたのである。未明に起きて出発の準備に取りかかる。珈琲やパンで充分腹を肥やす者、先き

で直食物が買えないかも知れんと云つて酒保でパンや缶詰類を買ひ込む用意のいい者、田舎に流されたら政治上の捕虜で別に犯罪をやつたんでないからきつと優待されるに違わん、之れは夏季田舎に保養に行く様なものだと思ふ者もある。さて捕われ人約三百は、三十人のボスニヤ兵に護送され、汽車に乗るべき所に勇み喜んで行く。途中で市民が吾々を罵詈したり、石を投げつけたりしたが、別に怪我人もなく停車場に着いた。吾輩は大きな行李が二個あつたものだから、其の運送料にして十六クローネン、切符代として十二クローネン取られた。やがて汽車は輾り出す。護送する兵士はボスニア節をやり出す。ステーション、ステーションでは出征兵士慰勞所などが設けてあつて、塙国兵士には酒を出したり、果物を配布したりして慰めて居る。祖国の爲めとて勇み立つ二十台の兵士。妻子を思つて泣き顔下げていた予備、後備の老兵。新婚の床未だ温かきに、従軍する夫を見送り兼ね目を泣き腫らした花嫁。一人息子に別れを惜みて、恙なく帰つて呉れ頼むと泣き入る老父母など多く見受けられ、何処も同じ人の情と感じ入つたわけである。尙將功成つて万骨枯る。之れ等多くの兵士再び故山の土を踏む者果して幾人あるか。汽車は十二時半最終ステーションドルゼンドルフに着く。

此の寒村を五六町離れて、ステーションの北方約四町の処に高丘が一つある。其の上に四百何十年と経た三階作りの一

大穀倉がある。高いから風通しがよい。穀物や薪を貯え置くには此の上もない所である。窓に穀倉だから所々に穴が明けてある計り、便所もなければ台所もない、要するに人間の住める所ではないのである。此の恐ろしい殺風景な穀倉に拘禁されると聞いた時には、吾々は実に失望落膽したのである。倉中は未だ穀物、薪、材木で充ちて居るから、之れを皆村に運搬し三百人の寢床を作らなければならぬ。麦を袋に入れて擔がされ、材木を運ばされるのである。麦の一袋は十五貫位あるので中々骨が折れる。それかとして袋を軽うして持とうとすると、ボスニア兵は銃剣でなぐる。先生等は独逸語が一つもわからんから猶困る。只セルビア語で罵るばかり。吾々には解らんから平気で居ると、銃で打ったり靴で蹴ったりする。実に野蛮極まる人種である。彼等は回々教徒で、南スラブ民族の一派セルビア族の間で、残忍狼の如き奴等である。土耳古帽を被って居る奥国兵が即ち彼等である。

さて一時頃から五時頃までかかって穀物や薪、材木は一時片付けたから、此度は村から麦藁を持って来て、各自其の夜の寢所を作るのである。朝から何にも食って居ないから、饑くて仕方がないが、パンの一片も買う事が出来ないのである。女子供は饑じさに泣き出す。其の日の夕暮、県知事は県医を連れて自動車でやって来た。吾々は恭しく列を作って敬礼する。県知事は兵士に命じて、吾々の所持金、小刀、紙入等を取り上げさしてしまった。所持金を渡さぬ者があって他

日見つかった者は、一クローネにつき二十四時間暗室に禁固して水とパンで苦しめてやるとの厳命。また渡して置けば自由解放の日には皆返してやると言うから、吾輩も瑞西を立たんとて銀行より引き出して置いた金千四百クローンを預けたのであるが、此の金は吾輩の手に再び帰って来なかったのである。開^そは後に記す如く、奥国政府が種々の口実の許に悉皆捲き上げて了つたからである。此の金は、故郷の老父母が早く帰って喜ばせて呉れよと言われるものだから、夜も眠らずして翻訳などして貯蓄し、帰朝の旅費にしようと思つて居たもの。斯かる詐欺手段で捲き上げられたのは残念であつた。

(五)

県知事は金捲き上げが済んだ後、知事は厳格な顔をして何かの特別の願あるものは出て申せといわれたから、吾輩は曩に瑞西行きを許可して置きながら此所に拘禁するの非を難する為め、帽子を取り恭しく県知事の前に進み出ると、知事は目を怒らせ、「恩知らずの日本人奴、何の要ありて独逸に兵を向けるのか、卑劣極まる人種だね」と衆人の前で吾輩を頭から怒鳴りつけた。吾輩も少し感情を害して、「何の要あって日本が独逸に兵を向けるかは政治上の問題で、吾輩一個人の知る所でない。又卑劣忘恩と日本を罵詈されるが、其れは穩當な言葉ではない。昔独逸人が羅馬人に指導されて居なが

ら羅馬を蹂躪したのは何と申しましょうか。県知事閣下、抑も戦争なるものは一国と個人との間の争闘でしようか、将又国家間或は交戦団体間に於ける兵力の争闘でしようか」と尋ねてやった。知事は益々怒って、「自分は黄色人種と話す要がないから、吾が目にも觸る所に居るな」といい捨て、自動車で帰ってしまった。静にして聞いて居た独逸語のわかる衆は、吾輩に握手して呉れた。然し之れは、吾輩の爲めには宜しくなかつたのである。此以後県知事は、吾輩を見る事蛇蝎の如くし、嫌忌の中心点となつたからである。故に知事は、吾輩を出来得るだけ苦しめてやろうとかかるのである。

扱吾々の今宵寝るべき廐は出来たが便所がないから、皆穀倉の西側なる畑の中を使用する。始め二三日は左程でもなかつたが、後には臭氣鼻を突いて実に堪え難い。雨の降る日、風の吹く日は悪臭紛々、為に感冒に罹つて死んだ人あつた。之れではいかんと云うので、二ヶ月後には塹壕見た様なものを掘り、木を二三本渡し、屋根を張つて兎に角風雨を凌げる様にした。部屋は大広間が三つあるから、其の一に三百人一緒に板張の上に麦藁を敷いて、寒ければ麦藁の中に潜り込んで寝るのである。時は九月であるが、夜半はモウ中々冷ゆる。毛布も何も無い人々は、実に気の毒な次第である。窓硝子も何も無いから、夜寒の風は遠慮無く吹き入る。□時々は雨まで降り込む。ドローゼンドルフに到着した初日は勿論、二日目の日も政府より呉れる食物は一つも無い。其れか

とて村に買いに行く事も許してくれなければ、村の商人に売りに来る事も許さない。空腹をして働かざる。斯かる労役に馴ない紳士等はホロホロ泣いて居た。子供は空腹を訴える。母親は詮方無く又泣く。セルビア語で吾々を嗚鳴りつけるボスニア兵は、語が通ぜないから吾々を打ち又蹴る。渴を医すべき飲料水はなし。紅塵全室に満ちて呼吸も塞がるばかり。吾輩も二回ほどボ兵に突き飛ばされた。此の二日間は忘れるに忘れ得られないのである。

三日目の日から穀倉の東の方の畑に、アルミーニウムで作つた五衛門風呂見た様なものが三個据え付けられた。之れが吾々の炊事場である。炊事人は拘禁人中から選ぶので、大部はセルビヤ人になつた。此等炊事人は、拘禁人一人につき六十六ヘラー(約二十七錢)事務所より貰い、村からパン、珈琲、薪、豆等を買つて来て、此の屋根もない炊事場で三百人の賄方をやるのだが、其の炊ぐ珈琲麦粥の如きは、鍋の罪か人の罪か、毎日々々焦げ臭いものばかり呉れる。さて吾々が此所で政府から貰う、否買わせられる食料は次の通りである。朝は黒いパンの一片と少し砂糖の入つた黒珈琲。昼はパンの一片に麦汁か豆汁二合。但し毎日曜日には、小指の様な肉を入れた肉汁に馬鈴薯の一切二切入つたもの。晩は朝の通りパンと珈琲である。吾輩には人間の食すべき食物とは思えなかつた。

此の憐むべき食料に、政府は吾々に毎日六十六ヘラー拂わ

せる。ドシドシ預け金の中から引き去ってしまうのである。後には一クローネに引き上げた。此の食物は取つても取らなくても拂わなければならないのである。尤も無一文の者は拂わなくてもいいのであるが、其代り道作り、馬鈴薯、堀川浚い等に使われるので、貧乏人は仕事の激烈なものと空腹をいうて泣いていた。或る時此等労働者の一人は、空腹に堪えず他人のパンを盗んだのがわかつて、ボスニア兵は可憐あはれにも之れを縛り上げて、穀倉の入口の柱に括り付け散々殴つた揚句、二十四時間衆人の前に曝した。又兵士と抗論して、銃剣で手を打ち落された露西亜人も居る。

(六)

吾々の寝台は大きい広間、窓と云うて正式な窓はない。只壁に所々穴を明けて鉄格子を嵌めた様なもの、此の部屋、否控所に麦藁を敷いて三百人の人々が、紳士、乞食、不具者、女、子供皆混合で、毛布も無く麦藁の中にもぐり込んで寝る。部屋の中央には、豆ランプが一つ其の光を保つて居る。兵士は銃に剣をつけ、山登りの靴を穿いて、足音高く行き廻つて吾々の眠りを妨害する。新聞を読むことは固く禁じてある。手紙を書き、本を読むには、机もなければ腰掛もないから、行李の上で食事もし、手紙も書き、腰掛もしたのである。餓くて仕方がない時は、麦藁の上に引ッ繰り返つて小唄でも歌つて、武士は食わずとも高楊子など云つて勇気を鼓舞

した日が多かつた。

一二週間経つと、彼方でも虱狩が始まる。殺しても殺しても繁殖するばかり。吾輩も虱軍と激戦しなければならぬ様になった。人は痰を板張の上に吐く。夜分には部屋の片隅で小便をする。階下に寝て居るボスニア兵に、星夜の雨を降らせてなぐられる者もある。十月の始め頃には大きな桶を二個部屋の入口に据え付けた。之れは夜半の大小便所である。是れと同時に薄いケツトと麻製麦藁人の袋が一枚づつ渡つたが、之れも九クローネン出して買うので、必要があつても無くても強制的に買わされるのである。黙つて渡して置いて吾々の預金から引き去る。奥国政府は總て此の調子で、吾人の金子を捲き上げるのである。

朝起きて顔を洗うにも水はなく、始め一ヶ月は水に接する事が出来なかつた。村から桶に入れて持つて来る水は、珈琲や汁に使つてしまう。後には骨を折つて深い深い井戸を掘つたが、泥水だから飲む事は出来ないが、はじめて顔や足など洗う事は出来た。朝の洗面は畑の中で珈琲や汁を入れる碗に其の泥水を汲んで来て、霜を踏み風に吹かれてやるのである。さて追々捕らわれ人が増して来て九百七十人となつたら、全員を三十人ずつの組に分ち、組毎に一人の組長を設くる。吾輩は第十九組の組長に選ばれた。組長の職務は、食事の時其の組員を列に就かせ、パンの分配、手紙を集め、又之を分与し、組員の望む品物の名を手帳に記し、之れを衛兵の

長に渡す、すると翌日其の注文品は村から来る、之を又組員に分けてやったり、部屋の掃除を指揮したりする位のものである。

県知事は時々やって来る。或る時例の通り全捕らわれ人は列に就いて居ると、病気に罹つて金の一文も無い者が十数名、知事に嘆願して薬を買つて呉れよと云うと、知事は「金の無いものは斃くたばつた (Krepien) がよい。吾々は敵国民に薬を買つてやる金はないのだと」、叱り飛ばした。又露探として二年間奥国で禁錮されて居た露の男爵夫人と、他に同じく露探嫌疑のもとに腕に青い紐を巻かれて居た男二人は、毎度県知事の前に呼び出される。或時知事は、兵士（此の時はボスニア兵ではなく予備の奥兵）に此等三人の行動を尋ねた。兵士が「知事閣下、三人の行動は今日迄の所申し分御座りません」と云うと、知事は兵士に厳命を下して曰く、「彼等露探が少しでも諸君に反抗する事があつたら、剣で突き殺すと見苦しいから、即座に銃殺してしまえ」と訓示した。これを聞いた人々は、皆知事の残忍なるに呆れ果た。

(七)

拘禁人が病気になつた場合には、村の医師にかかる。葉代や医師への支拂などは、平常の十倍も取られる。吾輩も十月の頃から始終、此の医師の取り扱ひを受けたものである。此の医師は奥国の貴族で、医科大学を出た人で、家豊かに其の

姉なる人と愉快に日を送つて居る。此の兄弟の人が吾輩の困難な情態を知り、且つ又病魔に襲われて居るのを見て非常に同情された見え、毎日曜日には露西亞生れのローズンタールと云う医学士、ポーランド人の伯爵と吾輩の三人で食よと云つて、鶏、卵、肉類、果物、珈琲等一山ずつ送つてくれた。物の理の解つた紳士だと有難く思つて居たのである。スルと此の事が知事に知れて、此の医師は拘禁人を取り扱ふ事を禁じられた。然し此の高貴なる医師は相変わらず毎日曜日には必ず物を送つて、吾々三人の悲しむべき日を慰めてくれた。手紙は一週間に二回程、父兄に宛ててのみ書く事を許された。切手は始めの中は貼らなくてよかつたが、後には郵税も拂わねばならなくなつた。訪問者は特に知事の許可を得て、衛兵の目の前で面会する事が許された。風呂は村で沸かしたのであるが、一週間三回十人ずつ組を作つて朝一回午後一回行くのであるが、湯代に壹クローネ六十ヘラー（約七十錢）出すと、珈琲にパンの一片をも出す。食物は政府のは勿論食べないから、少しでも金を預けた人は村から買うのであるが、代價は平常の十倍も拂わせられるから、一ヶ月の費用二百クローネン以上かかるのであつた。

吾輩は人より沢山着物も着、毛布も数枚あつたけれど、とうとう風邪を引いて発熱し数日寝て居るけれど癒らないから、願書を書いて何処かの下宿に行く事を許して呉れと願つた。けれど知事は、他の英仏人の金のあるものには之れを許

して置いて、吾輩には許可して呉れない。一週間計り後、セ
ルビア人の医師の尽力でグロスアウと云う所の仮病院に送ら
るる事になった。グロスアウはドロゼンドルフより車行四
時間位の所で、其処には今度新に拘禁の爲め設けた仮病院が
あるのである。

十一月の初めつ方であるが、吾輩の身にかかる秋は今始
まったのである。下塊のドロゼンドルフの在る近傍は維也納
よりずっと高いので、十月頃にはモウ雪霜は珍しくもない。
村の人々は爐の前で珈琲など飲んで居るのに、吾々拘禁人は
廐の中に饑を凌いで寒さに身を震わして居る。されば病者の
数の増すのは無理もない話。水雪が降って寒い風の吹き荒む
夕暮れ、一台の荷馬車は古い瘦せた馬に挽かれ、馭者の老爺
を乗せて例の穀倉の前に現れた。上には何の覆いもなく、車
上には麦藁が敷いてあつて、両側には藁の落ちない様に棒を
二三本立てた計りである。此の荷車は、吾々九人の死に瀕し
て居る病人を運搬すべく来たのである。病人を運搬するには
日もあろうに斯の恐ろしい暴しの日にて、人々皆奥国官庁の
人道を無視しているのに切齒して居た。

(八)

サテ吾々九人の者は人に助けられ、此の荷車に乗り込ん
だ。此の羨ましくもない穀倉を出たのは午後六時であつた
が、村にある拘禁人の事務所種々の取り調べを受けたの

で、ドロゼンドルフを出立したのは午後八時、モウ真暗い
のである。風はしきりに吹き、水雪は遠慮も無く横から打ち
つけ、車上の麦藁はじくじくに濡れて居る。車は時々石に打
ちつかつて「打つかつて」飛び上がる。病人一同は濡れ鼠の
様になつて居る。夜は真暗、時々老馭者が持てる提灯の光が
見ゆる計り。皆わなわな震うて一団となり、グロスアウに着
くのを今か今かと待つばかり。斯から辛酸をなめて、午後十
時半遂に目ざす所に到着した。

管理人は吾々を見て、「此等の人間は誠病氣か虚言を言っ
て居るんだらう」と、車中に気絶して居る者には目もつけな
いのである。吾々八人は、氣絶している者は看護人に任せて
置いて、ブルブル震つて病室に入る。看護人に助けられて濡
着を取り換え、熱を計つて貰うと三十九度と云う。突然気分
が悪くなつて暫時は正氣を失つたのであるが、独逸の諺に
「Unkraut vergeht nicht」(雑草は盡くるものにあらず)と云う様
に、再び吾に帰つた。他の八名の者も、一人は死んだが、他
は皆長の重病の後全快した。

病室と云うものは大きい部屋が二個あつて、五十何人と云
う病人を収容して居る。壁は湿つて居て、藪が一面に生えて
居る。室の一隅には爐が据え付けてあるが、石炭が無いので
火を焼く事も稀である。室内は平常湿気に充ち、麦藁の敷布
団、毛布、寝台は乾いた事が無い。病人を殺すにはもつてこ
いの所である。黴臭い部屋に薄い木綿のケット一枚で震わせ

るのだもの、壮健な人でも病気になるてしまふ。それに食物はドローゼンドルフと異つた所はない。只毎日の様に呉れた豆汁の代りに、此所では時々米の粥を出す位のものである。重病者に食物の代りに与える牛乳の二合も、大部分は水だから仕方がない。薬代は皆自弁だから、金の無いものは買う事が出来ない。病人は如何して癒れと云うのであろうか。

医師は、塙人は勿論来ては呉れない。同じ拘禁人で維也納で医学をやつて居たセルビア人が吾々の命を左右するので、危険な話である。看護人は、露西亞やセルビアの人がやつて居た。ドローゼンドルフの事務所から、吾輩の勘定書や預金の證書を送つて来たから見ると驚いた。吾輩が買ひもしない洋服、外套、食料品、一週間に三回ずつの風呂代等、手帳につけてあるのと合わないのが約三百クローネン程其の勘定書に記してあつた。預金の中から引いてある。早速書面で交渉を始めると、曩の勘定書に違わない、お抗議の品物は貴殿が買われたに全く相違なしとの返答である。其れよりしばしば交渉したが、もう返事もしない。県知事の所に言つてやつても返事はない。

(九)

或日の事、英仏日の拘禁人を保護して居る米国の大使が、グロスアウ拘禁人収容所や病院を視察に来られると云う通知が来た。サア事務所では大騒ぎ。今迄ありもしない薬品棚を

作り、之に種々の瓶を載せ、患者の寝て居る所の壁には生年月日、病名、熱度等を記した紙をさげ、板張は洗わせ、壁の黴は見えぬ様に石灰で塗らせ、爐には盛に火が燃して居る。各患者には白布一枚ずつ与て濕れる寢床を覆わせる。昼食には米の粥に牛肉の一片(こんな御馳走は三月月以来見た事がない)ずつを分配する。吾々は内々笑つて居た。折角骨を折つて大使の訪問を受くる準備をしたのに、米国の大使は終に來られなかつた。後で呉々も塙国人の小兒然たる悪戯に腹を抱えたわけである。

然し此処では新聞(但し塙独のばかり他国の新聞は戦争中入国を禁じてある)も読める。食ひ度いものは酒保(Kantine)から持て來さして室内で自炊をやる事も出来、洗面も看護人に水を命じ廊下でやる事が許してある。衛兵は独逸民族に属する塙人で、病院に來るものは只軍服つけた許り。銃も劍も持つて居ないし、吾々に対しても実に中々親切であつた。

吾輩も一ヶ月位の後漸々快方に向つたから、露西亞の大学生で余り良く独逸語の解らない患者と独逸語と露西亞語の交換教授をしたり、又英語科を設けて英語の習いたいと云う人々に教授したり、興味ある新聞の記事など読んで静に病を養つて居ると、新聞では戦争上手の日本軍が五十万仏蘭西に上陸するとの噂が毎日記してある。やれ一軍は西伯利亞鉄道で來進する、東プロイセンではモウ数十名の日本將校兵卒が捕虜にされたとか、仏国は援兵のお礼として印度支那割讓を

約したとか、其れは其れは大騒ぎであつた。吾輩も、吾軍いよいよ仏国に上陸したら千載一遇の好機会だから、七年以來辛酸を嘗めて学び得た独逸語を応用し日本軍の通訳となり、伯林開城の日には一角の功を樹てて皇恩に報い奉るうと雀躍し、内々脱走の計画を立てて確かな報告を待つて居た。併し噂は毎日記してあるが、確實な事はわからぬ。後には日本は欧州遠征を中止して支那併呑に取り掛つたという記事が出た故に、吾輩は時を待つ事に決心した。

二ヶ月過ぎて、吾輩の病氣はいよいよ全快した。全快者は元の処に帰れとの命令。然うすると吾輩は、復例のドローゼンドルフに行かなければならぬ。依つて知事に願書を書いて、キルヒベルクと云う拘禁人收容所にやつて呉れろと頼んだ。知事も之れを許して呉れたが、出発前三日間はグロスアウの拘禁人收容所で暮らさねばならぬ。

此所には收容所が二つある。一つは少し服装のいい人の行く所。他の一に労働者乞食などを收容して居る所である。此の第二の收容所は、暗い穴倉で麦藁が一杯敷いてある。空気の通わぬ濕気□□広堂で、廬よりはずつと悪い。此所は貧しい人が豚のような生活をして居る。第一收容所は大きな下宿屋見た様に出て居て、三十近い部屋がある。拘禁人は大抵英、仏人で、小奇麗な露西亞人、セルビア人も居る。中には教育のある人々もいたから、面白い話も出来る訳。一つの部屋には十五人乃至三十人位ずつ、袋に入れた麦藁の上に毛布

一枚で起居する。共同テーブルがあつて、其の上で自炊もし、手紙も書く。室内は空気の流通もよい。天氣の好い時には庭で散歩も出来るから、前のドローゼンドルフと比較すれば雲泥の違いである。而して時には舞踏会や芝居などもやる。此の時から吾輩の艱難も下り坂になつたと云つてもよい。グロスアウの話は未だあるが、余り長くなるから此れで止めて、之から吾輩が最終に拘禁されたキルヒベルクの話に移る。

(十)

懐しい日本では門松を立て雑煮を祝つて居る正月三日、吾輩は敵国で囚われの身で三遷して、今からキルヒベルクと云う所に流されるのである。長い間の雨雪で道は悪し、荷物もあり、且つ病氣あがりだから、二十五クローネに出して馬車を一台雇つたのに、馬車は持て来ず又例の荷車をよこす。其の不足を言うても聞いては呉れない。止むを得ないから其の荷車に載せられ、キルヒベルクに向つて出発した。

道が大変悪いから車があたつく。雨も降る、風も吹いて居たが、三時間の後には先方に着くと云うから辛抱した。雨が激しく降り出した時に、途中の飲食店で昼食した。キルヒベルクに来て見ると、曩に辛酸を共にした英人や仏人が居て吾輩を歓迎して呉れた。此所の收容所は曾て貴族の住んで居た所と見えて、中々立派な建物。名もシュロスキルヒベル

ク「キルヒベルクの御屋敷」と云う。英国人が吾々の部屋に同居しろ、日英同盟して居れば露仏の攻撃を受けても恐るるに足らんなどと云うから、いうが儘に英人の十二人居る大きな小綺麗な部屋に行きて、寝台を一台貰った。室内には長いテーブルと腰掛が各一脚ずつ、共同洋燈あり、パケットあり。各拘禁人は寝台、麦藁の敷布団、毛布、白布手拭一枚ずつ貸与された。後には枕、洗面盥、石鹸入も渡った。窓は充分大きく、空気の流通も良い。暖爐にも火が盛んに燃えて居る。拘禁人は資財あり、教育のある人ばかり。此処では衛兵吾々を虐待する様な事はない。

此処には部屋が十五ばかりあって、露人、セルビア人、仏人の小綺麗な風して居るものばかりが居る。同じ奥国人でも、政府の信用のないポーランド人や、ルーテネン人も拘禁されて居た。食物は、朝は珈琲一杯に、馬鈴薯でつくった黒い砂かむ様なパン一片。昼は、パン一片、馬鈴薯の水煮、汁一杯と肉一片（始めの内は一週三回であった）。晩はパンと珈琲である。上記の食物に、吾々は一日一クローネ取られた。

政府の食物で満足する事は健康な人には出来ぬ。依つて朝夕は酒保から、高価な肉類、鶏卵、米、茶、野菜などを買って室内で自炊をやるのであるから、一ヶ月の費用如何しても二百クローネ以上かかる。其の代りに新聞も買える。演説会を開いたり、雑誌を発行したり、脚本の朗読、語学の交換

教授などして、愉快に日を暮らす事が出来た。

英人が「行くには遠しデベレアリー」とやり出すと、仏人が禁じてあるにも拘らず敵愾心のやるせない顔して「いざ立て祖国の丈夫よ」と鼻からぬかすと、「和尚が飼ひし愛犬は」と声根太く、さも重もそうに露西亜人がやる。吾輩は聞いて笑うのである。或るポーランドの男爵が、ポーランドの歴史及び将来と云う題のもとに二夜に亘つて演説して、吾輩にも日本過去及び将来に就て話せと云つて聞かない。英人もポーランド人の後押しするものだから、吾輩も止むを得ずやつてのけた。其れから二三日経つと、衛兵長の特務曹長は、英人の小説家、露人の新聞記者と吾輩の三人に、勉強の出来る小さい部屋を貸してやるから何んでも好きな事をするがよいと大変親切である。此の小さい部屋を貸して貰つてからは、読み書きは勿論面白い智識の交換も出来た。

(十二)

各部屋には室長というものが一人あって、部屋の取締、同居者の監督、夜、床に就く前に室内に脱走者なしと衛兵長に届け出たり、郵便、洗濯物の世話などする。吾々の部屋には室長の必要は余り感ぜない様なものだが、特務曹長は吾輩を此の役に撰出した。然し吾輩の仕事は、毎日英露が兵を交ゆる其仲裁をする位なものであった。乃で英露両国の外交官は何れも日本の吾輩を手に入れようと努めたが、吾輩は足を焼

いて猿の爲めに火の中から栗を掻き出す様なものでない。二人に喧嘩させて置いて、自己の位置を堅固にする考えばかりしていた。

斯くて三月も半ば過ぎ、暖気も増して来たから、時々庭に出て日向ぼっこをやったりフットボールをしたりし居ると、突然米国外務省から手紙が来た。それによると、吾輩は近しい中に自由放免になるから、瑞西に行つてもよいと言う通知が、米国外務省からあつたとある。吾輩は夢ではないかと許り喜んで、知事より通知のあるのを今か／＼と待つて居た。待ち詫て米国外務省のいう事は信用は出来んと諦めて居ると、三月二十六日の午後九時過ぎ、一通の電報は明朝十時県庁迄来れ、解放してやるからと書いてある。吾輩は其晩荷造に取掛つた。七ヶ月間籠の中に苦しんだ小鳥が、籠から出れて自由の天地に翔け行く時の嬉しさを抱いて、其夜は寝に就いた。多くの人々、吾輩の幸福を祈り且つ羨むのであつた。

翌日は七時に起き、人々に別れを告げ、車を飛ばし汽車で行きして、特務曹長に連れられ県庁に着いて、旅券等（二三紛失品を除く外）皆返してもらい、拘禁中政府の取扱に不平を鳴らす点無しという書面に署名した（不平があるなど言つたら帰して呉れない）。夜の十一時過ぎ維也納に着くと、刑事巡査が待つて居て吾輩の旅館までついで来た。翌日米国外務省に行つて種々な札を述べ、米国外出立の證明書をもらつて瑞西チーリヒ市に向つて出発した。汽車の中で五六回も喚

国官吏に調べられたが、都合よく出国する事が出来た。

三月二十七日頃の維也納は、モウ火の消えた様であつた。若い男は一人も居ない。稀に見つかると、足の無いのか、手の切れて居るものばかり。老人、女、子供で、婦人は多く喪服を着て目を赤くして居る。大学を始め他の大きな物は、皆赤十字の旗を出して病院に変化してしまつた。あれ程多かつた自動車は、大概は軍に出て居て市街は淋しい。知人の所に暇乞に行くと、日本人とは話す必要はないとて面会拒絶する博士連中もあつた。之に反して、仮令国は戦をして居ても君と僕との間には何の恨はなし、吾々がやる学術には国境がないのだから、今後もきつと通信怠らぬ様にしよと握手して呉れる人々もあつた。

瑞西に来て見ると、独逸から逃げて来た日本人が大勢居て、独逸拘禁談も聞いた。吾等日本人は、独逸、奥太利亚で斯く辛酸を嘗めさせられたが、吾政府は独逸の捕虜を非常に優遇して居るとか奥国新聞で読んで、吾輩も大いに満足した。仇に報ゆるに恩を以てする大和民族の優雅な性情は、今や世界に認められて居る。吾輩の敬愛すべき福岡日々読者諸君も、福岡に居られる前膠州太守マイヤーフォンワルデック氏や、其の部属の将校士卒に対し、寛大にして高等なる九州人士の氣質を表されているであろうと吾輩は遙に想像して、肩身の広いように感じている。(完)

【追記】本稿は、二〇一五年度～二〇一七年度 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「第一次世界大戦期の世界的「人の移動」に関する基礎研究・アジア・欧州間関係を中心に」(課題研究番号：15K12995、研究代表：奈良岡聰智)による研究成果の一部である。

(1) 例えば、山室信一『複合戦争と総力戦の断層―日本にとつての第一次世界大戦』人文書院、二〇一一年、同他編『現代の起点 第一次世界大戦1 世界戦争』岩波書店、二〇一四年、などを参照。

(2) 代表的な研究として、Heather Jones, *Violence against Prisoners of War in the First World War: Britain, France And Germany, 1914–1920*, Cambridge University Press, 2011, Matthew Stibbe (ed.), *Captivity, Forced Labour and Forced Migration in Europe during the First World War*, Routledge, 2013 などを参照。

(3) 奈良岡聰智『八月の砲声』を聞いた日本人―第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」(千倉書房、二〇一三年)。ドイツ語では以下の論文がある。Kolf-Harald Wippich, *Internierung und Abschiebung von Japanern im Deutschen Reich im Jahr 1914*, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 16, 55 Heft1, 2007.

(4) 同右の巻末リストを参照。

(5) 「青森郷友会総会席上に於て」と補記されている。

(6) 「在仏国巴里 城戸愛次郎」と記載されている。本文中も「城戸愛次郎」と表記され、「愛三郎」でない理由は判然としないが、この記事が本人の手によることは間違いないと思われる。この点については、梶原克彦「第一次世界大戦におけるオーストリア＝ハンガリーの捕虜・民間人抑留政策―日本人抑留者の事例を中心に―」『愛媛法学会雑誌』第四四巻第一・二合併号、二〇一七年、を参照。